

文献による「氣」についての考察

— 中小企業経営・原動力の研究に向けて —

岡 本 俊*

A Study of "KI" with the USE of Literature

— Towards the Research of Motive Power for Smaller Enterprise Management —

Toshi OKAMOTO

"Ki", the mysterious, invisible life force that man potentially is considered to have, is different from the "parts" such as "ability", "enthusiasum", and "ways of thinking" which have been studied as constituent factors of the growth/success of smaller enterprise management. "Ki" supersedes the parts, and is "the whole that is greater than the parts". I have come to believe that structuring of the the growth/success factors may set a limit to elucidation of success/growth of smaller enterprises, which are considered to be the whole based on "Ki". Therefore, this modest paper, with a different perspective, materializes my effort towards the study of the involvement of "Ki" as the motive power for the success of smaller enterprise management.

I. はじめに 本研究の目的

不可視の生命エネルギーとして、人間が潜在的に備えているとされる不思議な「氣」は、これまで中小企業経営の成功・成長を構成する要素として研究してきた「能力」「熱意」「考え方」といった部分とは異なり、部分を越える「部分以上の全体」である。成功・成長の諸要素を組立てても、「氣」が根幹と考えられる全体としての中小企業の成功・成長究明には限界があるのではないかと考え、これまでの視点を変え、中小企業経営・成功の原動力としての「氣」の関わりにつき、ささやかな研究を試みようとするものである。

「虚空は実は何もない空虚な空間ではなく、無限のエネルギーに充たされている。宇宙はエネルギーの大海であり、万物万象はその大海に起こる小波さなみのごときものである。」
— アメリカ理論物理学者 D. ボーム ... そしてこの主張は、「氣」の世界観と酷似していた。

*経営工学科

II. これまでの研究経過

これまで中小企業経営の成長要因をテーマとして、経営者要因、なかでも経営者能力を最重要との視点で基礎的研究を行ってきた。しかしながら「経営者の能力は、一般に自分が思っている以上に豊かであり、平均的能力の人が大きな成果を上げる方法をもっている」 1) および

「千差万別の個性がありながら、人間は構造的に同じであり、経営もヒト、カネ、モノという資源構造や指導原理、用具も同じである。しかも生活体として両者に変わるところはない」 2) から、本研究は視点を換え、経営者要因の「能力」のほかに、「考え方」「エネルギー」(熱意・ヤル気)を加え、3つの要因の積により企業の成長が方向づけられ、結果として「成功」をもたらす、との仮説を設定した。

すなわち、経営成長を決定づける「公式」=「考え方」×「熱意」×「能力」である。なかでも経営者の「考え方」が企業成長および成功に決定的な影響力をもつものとして、社会心理学、行動科学の方法および東洋医学の発想を援用した「成功・成長構造モデル」の模索を通して、学際的アプローチにより、企業成長・成功と経営者の考え方の因果関係に迫ろうとした。

III. 研究の方法 — 学際的アプローチによる

1. 心理学の方法 3)

心理学では、作用を及ぼすものを「刺激」という用語でおきかえ、生じた変化を「反応」という用語で表わす。刺激と反応の間の法則を発見するのが心理学である。

レヴィン (Lewin, K) は $B(\text{行動}) = f(P, E)$

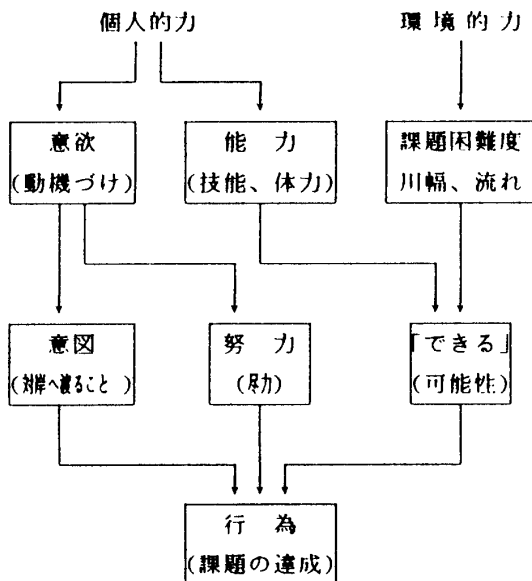
P は人、E は環境、で行動をとらえようとした。この表現を刺激 (S) と反応 (R) の間に有機体 (O) を介在させた、「心理学における S O R 理論」図式、

$S \rightarrow O \rightarrow R$ でおきかえると、 $R = f(O, S)$ と表わしてもよいであろう。

刺激 有機体 反応

ここで、経営者の「考え方」と企業経営成長および成功の因果関係をみるため、S (刺激、すなわち「熱意」と「能力」を一定にし、経営者の O (「考え方」) を変化せるという構造を仮定し、R (反応) を「企業成長」、「成功」という図式から実験により、このモデルの妥当性を検討する。

2. 社会科学の方法 — Heider および Weiner の変形モデルによる 4) および 5)



行動の個人的・環境的構成要素 (Heider, 1958)

「個と集団の社会心理学」狩野素朗著

ナカニシヤ出版 P. 50 (1989年)

成功の原因帰属			失敗の原因帰属		
	固定的要因	変動的要因		固定的要因	変動的要因
内的要因	能力	努力	内的要因	能力不足	努力不足
外的要因	課題の容易性	幸運	外的要因	課題の困難性	不運

ワイナーの成功と失敗の原因帰属要因マトリックス
(Weiner, B. et al., 1972)

「人間行動論入門」心と行動をさぐる

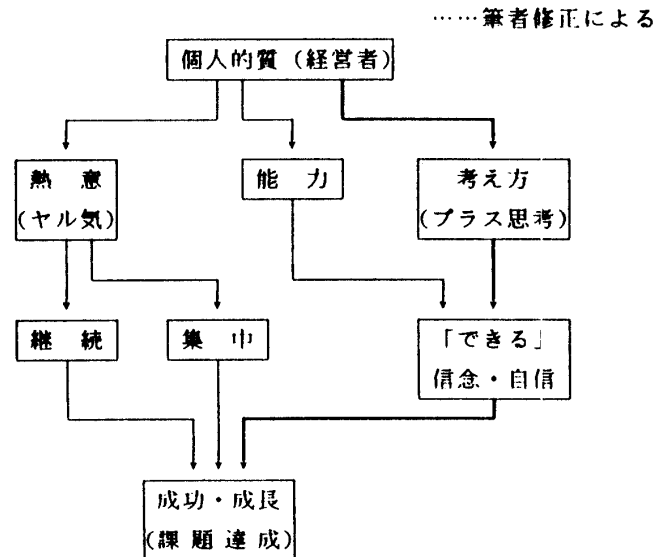
(北大路書房 P. 90)

堀端孝治・高橋 超・磯崎三喜年

編 (1989年)

次に、上記の Heider および Weiner の成功帰属のモデルを、以下のように変形を試みた。「考え方」の内的要因を強調するためである。

1) Heider の変形モデル (図表 1)



2) Weiner の変形モデル (成功の原因帰属)

	固定的 要因	変動的 要因
内的 要因	能力	考え方
	熱意	

3. その他

企業成長において 1959 年発表された E・T・ペンローズの「企業成長の理論」は、組織における C・I・バーナードの業績にも比肩すると考えることができ、今日においては企業行動に関する数少ない新古典の一つと言われ、その後の企業論・企業成長論に与えた影響は極めて大きなものがあつた。

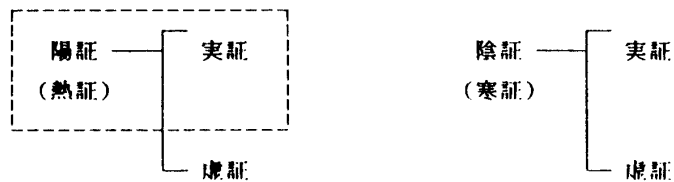
ペンローズは、企業成長を一環して「内的要因」——主体的要因に基準点をおいて、描き出している。この見地から上記、Weiner の成功の原因帰属は、ペンローズの「内的要因」により変形モデルとして形成した。6)

一方「企業成長論」において清水龍登氏は「企業成長の原動力となる内的成長要因は、経営者の革新性と製品の革新性である」とされ、また「経営者の革新性は企業家精神として“経営者の考え”の中に常にもち続けられている」と指摘しておられる。7)

さらに同じく“中堅・中小企業論”において、「中小企業の成長の原動力はその柔軟性ないしは積極的な環境適応力である」とも言われている。8) しかしながらここでは中小企業経営の成長原動力はナポレオン・ヒルのいう「エネルギーをもった具体的物体である思考」9) との仮説のもとに、経営者の思考（ものの考え方）を中心に、その積極面（プラス思考）に焦点をあて、「経営者の考え方」と「企業成長の原動力」に関する因果関連についてアプローチを試みた。

4. 東洋医学の発想・援用による「成功・成長構造モデル」基軸の設定 10)

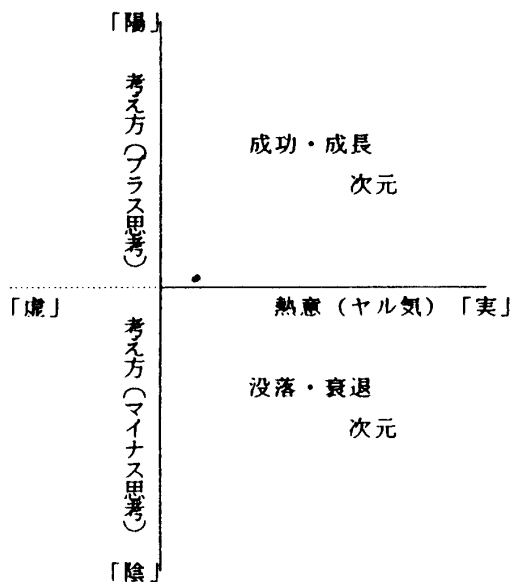
- ・ 東洋医学の基本をつくっている思想に陰陽五行説があり、自然哲学思想の裏付けによる。陰陽説の原典は「易経」であり、陰陽説は「陰」（静的なもの）、「陽」（動的なもの）に分けられる。この「陰」「陽」は森羅万象を構成する2つの原理といわれ、病気は、さまざまな陰と陽のバランスが崩れたところに発生すると考えられた。
- ・ 企業の病気、すなわち衰退、没落も、動的な「陽」が「陰」に変わりバランスが崩れた結果ではないかと推定される。
- ・ 陰陽概念から派生して「虚」、「実」というお互いに対立する概念があり、「実」は「陽」に属し、「陰」は「虚」に属す。この組合せは四象に分かれる。



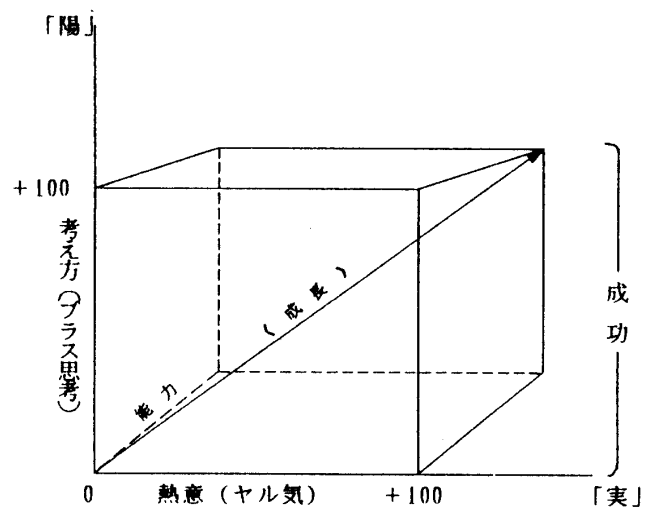
- ・ 「実」はエネルギー量の充実、抵抗力充実であり、「虚」は、エネルギー量、抵抗力ともに不足であり、この2つは、定量分析の区別であり、
- ・ 「陰」「陽」は、実および虚をふまえた総合定性分析の区別とされている。
- ・ 企業の成長、成功は、四象のうち、「陽」および「実」の象限のなかで実現されうるとの仮説フレームを設定し、ここに企業の成功、成長構造モデルの基軸を下記の如く書き、経営者の「考え方」と経営成長の関連究明の出発点とした。

(図表2)

1) 基本フレーム



2) 成功・成長構造モデル



IV. 「氣」と現代

「氣」は眼に見えないが作用はある。

通産省は、人間が潜在的に備えているとされる不思議な力「氣」など、人間の未知の能力の解明に高い関心を示し始めた。最先端の研究者の間で人間の潜在能力を科学的に解明しようという試みが出てきた事に注目。これらの研究が5年～10年後に電子工学などの技術革新につながるのではと期待を寄せている。また、将来性が高い研究課題を見つけ出し、94年から長期研究プロジェクトを開始することも検討する。一步間違えばオカルト呼ばわりされかねないテーマであるが、通産省は「興味本位でなく、あくまで科学的に取り組みたい」と真剣な様子である。当面は、一昨年秋に発足させた「感性ビジネス研究会（商務流通審議官の私的懇談会）」で、人間や動植物の潜在的な能力について、現在どのような研究や実験が進んでいるのか情報を集め、今後の研究の進め方についても議論する。

「以心伝心」、「直感」あるいは「氣」の流れなどといった、これまで非科学的と片付けられてきた事象について、最先端の科学技術を駆使して解明しようという動きが出てきている。国内の研究機関では、植物同士の“意思伝達”を測定する研究が進められている。このような動きに通産省も注目し、潜在能力が働くメカニズムを明らかにすることによって、①言葉や文字などによらない革新的情報伝達手段、②難病も克服できる新たな医療技術——なども開発できる可能性があるとみている。

（1993年1月31日付日本経済新聞の記事「通産省、“氣”の解明に挑戦」から）

V. 「氣」の概念

氣の概念を定義づけることは極めて難しく、極言すれば氣とは「現象界における一切の存在ないし機能の根源」と言えよう。

この現実世界の一切の存在物は氣から成る、といわれる。氣は存在物を構成する究極極微のアトム的要素と考えられるためである。古代の中国人は、生命体は氣即ち生命の根源が集合したものであり、その内なる純粹精微な氣（精氣）が体内を不斷に流動し循環することによって、生体の機能がはたらき生命が維持されると考え、また自然界における万物の生成・変化・消滅も、つまるところ「氣」の動静にほかならないとしている。

さらに、人間の精神機能をつかさどる心のはたらきも「氣」であった。精神の担い手としての氣は、「心氣」、「意氣」、「神氣」と呼ばれ、もの、いのち、こころの三界は、すべて「氣」の所作^{しよさ}以外の何ものでもない、とされている。この「氣」はアトムのように不連続ではなく連続体であり、物も身体も精神も「氣」の観点からは別個のものではなく、西洋流の物心（身心）二元的思考とは根本的に異質な考え方であると言える。

万物は「或るもの」から成り、一切は「或るもの」のはたらきに帰する。古代中国人は、その極微にして根源的な「或るもの」を「氣」と呼んだ。

「気」の次元でものごとを見ると、物心の別・身心の隔たりは消え、全てはもともと一つであるという“気一元論的世界観”がそこに生まれる。

「気は体の充」と『孟子』は言い、「気は身の充」と『管子』（心術下）にある。身体は気によって満されており、気が不足したりバランスが崩れると病になると考えられた。その気は、天地の間に充ち満ちている気と同質のものであり、この宇宙に遍満している気が、凝集と拡散を繰り返し、絶えず流動することによって、万物・万事の生成・変化・消滅が現象化する。この「凝集と拡散」、さらに「流動」という概念は、「気」の世界を理解するうえで極めて重要であるとされている。

① 中国の「気」の概念

<人間の気><自然の気><原理としての気>が、春秋戦国時代には全て出揃い、これら多様な<気>が複雑に絡み合い、まとわりあって中国伝統の思想、文化を形成していく。ここで「気は観念的存在なのか」、「気は人間が五感によって把握しうる実在なのだろうか」という問題が残る。中国人は、気の実在を医学の世界で明らかにし、“気の医学”と呼びうる中国伝統医学において、生命の根源である気とは、人間が五感で捉えられる物質的性質をもち、「経絡」を流れる生体エネルギーでもあるとした。

② 日本の「気」の概念

日本における「気」は、エネルギーや物質的な性格をみてとる傾向は少なく、もっぱら人間の心のはたらきとして精神面（とくに情緒面）を指していることが多い。

平安時代は「もののけ」など「け」として用いられてきたものが、源平時代以後、悪い「気」を払いのけて良い「気」を積極的に身体や精神に取り入れ「景気」をつける、といった使い方に変わり、さらに「けしき」の仮名づかいから次第に「気色」という読み方へと、「け」から「き」への変遷をとげた。

室町時代になると（14～15世紀）「気」は自分の感情や心理を内容とした意味を持つようになり、“庶民の時代”とされた室町時代には、能などの芸能の発達により「気」に新たな意味がこめられるようになった。

日本語の「気」の多くが人間の精神的な何かを指していると気がつく日常語の表現をいくつか挙げると――気が合う、気がいい、気が利く、気が重い、気が済む、気がつく、気が散る、気が抜ける、気が晴れる、気がゆるむ、気に入る、気にかかる、気に食わない、気を休める、気を配る、気をしづめる、気を使う、気を取り直す、気を吞む、気を引く、気を休める、気を許す、気をもむ――などがある。

いずれも心のもち方や情緒、あるいは一定の精神状態を意味している。

日本語を学ぶ外国人を悩ませるのは、日本語の文法の不規則さと「気」の一字である、といわれる。

VI. 「氣」をめぐる東西の出会い——東洋と西洋の対話——「氣」論争

筑波大学で「科学・技術と精神世界」と題する学際的な国際シンポジウムが開催された際、筑波大学教授（哲学）の湯浅泰雄氏は、物心二元論に二つのタイプをみている。一つは、物質と精神を分離する伝統的二元論であり、デカルトに始まり、近代の客観主義的経験科学の基本的な大前提となったものである。もう一つは、物質と精神の間に相互作用的な相関関係を認める新しいタイプの二元論で、深層心理学・心身医学、東洋医学など、主観主義的経験科学に見出させる。

東洋哲学では、瞑想の実践的訓練を通じて、次第に心と身体不可分の一体性が認識され、両者の別は消滅すると主張してきた。禅でいう「^{しんしんいちに}心身一如」、<身心脱落>の教えである。東洋医学の現代的研究は、この主張に対して実証的支持を与えるもので、「氣」のエネルギー（宗教心理学研究所所長の本山博氏が考案したAMI（経絡—臓腑機能測定器）を用い、東洋医学にもとづいて電気生理学的方法により間接的に測定できる）が流れるという「^き経絡」は、心理作用と生理作用を統合した高次の未分化なシステムとして、「無意識的身体」と呼びうる。

VII. 「氣」は科学で解明できるか

氣の存在様態は多岐にわたる。生体エネルギーを含むすべての氣が、従来の科学的方法で解明されず、壁に当たったときには、思い切った方法の変更が迫られる。

意識と生命と身体（物体）を統合する全体的科学的方法が確立されて、初めて「氣」がその姿を現すのであり、「氣」の現代科学的な研究はそのような可能性を秘めたものとして期待されている。

VIII. ニューサイエンスと「氣」

新しい時代を開く「知のパラダイム」が求められている今、ニューサイエンスと呼ばれる分野が脚光を浴びている。

ニューサイエンスの最大の特色の一つは「還元主義」への批判にある、とされている。近代自然科学の発展は、デカルト、ニュートン以来の古典力学的世界観に支えられてきており、そこでは万物は一個の機械装置のように、それを構成する部分的要素に還元することができ、対象を分析して部分相互の関係をみることによって全体を理解するという。このいわゆる「還元主義」は、科学を文字通り「分科の学」として、物理学をはじめとする科学の基本的な方法とみなされるようになった。

今世紀に入り「ハイゼンベルグの不確定性理論」あるいは「アインシュタインの相対性理論」があらわれ、物理学はそれまでの古典力学的世界を放擲せざるを得なくなった。

また、還元主義に対しても生物学界を中心に、「全体は部分の総和以上」であり、対象物はそれを構成する諸要素をいくら集めてみても全体を知ることはできない、という

厳しい批判が加えられるようになった。

ニューサイエンスの大きな特色は、これまでの要素還元主義ないし機械論に反対する全包括的なシステム論の主張、二元論（二分法）に対する相関説の重視、及び東洋思想への接近である。現在さまざまな学問分野に、このニューサイエンスが波及しつつあるが、それが最もラディカルに表れているのは医の世界である。

1. 「気」の世界観

① F. カブラ『タオ自然学』（1975年）

カブラは現代物理学の成果と東洋の伝統的な宗教・哲学との近似性を巧みに描き、永遠不滅な実体などは一つとしてなく、すべては関係のうちに現出し、統合された全体の中で生起する、と論じている。カブラはまた、現代物理学が教える考え方は、原始仏教や華嚴、易や道教といった東洋の世界観にはかならない、とも言っている。

② 究極の实在を問う——「ボーム理論」の骨子

D. ボーム（1917～）はアメリカ生れの理論物理学者で、かつてはアインシュタインの共同研究者として『量子論』を著し活躍した。ボームの立場は徹底した反アトムニズムであり、すべてを運動としてとらえる「運動一元論」の視点から「分割不可能な全体性」という考え方を提示し、「万物は分割不可能な全体的運動である。そして、一見分離した事物と見えるものは、全体的運動の相対的に安定した側面の抽象である」としている。

断片から全体へ、見えるものから見えざるものへ、とボームの志向は進んだ。このようにして提唱されたのが、＜暗在系＞Implicate Orderの概念である。

＜暗在系＞においては物心の別もなく、心身の別もない。すべてが一つに巻き込まれ、溶けこんでいる。それを第一義的な实在とすることは、従来の物心二元論に対する挑戦であり、ボームの＜暗在系＞理論は、デカルト以来の西欧における、心と身体（物質）は別個の異なる実体で何かの相互作用によって関係づけられているとする理論とは、両立しない。

身体は心だけでなく、ある意味において物質的宇宙のことごとくを巻きこみ、心は物質一般、なによりも身体を巻きこんでいるという。宇宙が無限のエネルギーに満ちているというボームの主張は、気の世界観とあまりにも見事に符合しているように思える。

2. 実証

「気」の大海に種を播く——「ハイボニカ（水気耕法）」の世界

宇宙は無限のエネルギーに充たされ、人間はそれをもっと活用できることを証する画期的な実例。

水気耕法の奇跡として、筑波科学博で政府のテーマ館中央に展示されていた「トマトの巨木」は、科学博期間中に13、312個のトマトを着実した。このトマトは「ハイポニカ（水気耕法）」と呼ばれる独特な栽培法によって生まれた。それは土を全く使わず、酸素と養分を含ませた水を効果的に与え、植物が本来持っている無限の生命力を引き出す方法である。「ハイポニカ」は、土と訣別した全く新しい農法なのである。

これを開発したのは、兵庫県丹波篠山に住む野沢重雄氏である。野沢氏は昭和38年から新しい栽培法の研究に取り組み、昭和45年にこの「ハイポニカ」を考案。驚くべき成果をあげて、昭和57年には科学技術庁長官賞を受け、一躍脚光を浴びるようになった。

「ハイポニカ」誕生の背景には、大アマゾンの啓示があった。地球上の大気酸素の四分の一を供給しているという大河アマゾンの大密林地帯には土らしい土はない。大部分の植物は水生あるいは気生である。光と水と大気――それだけで植物が宇宙のエネルギーを吸収して壮大な成長をとげられる。植物の生育は、土が絶対条件なのではなく、いかなる環境であっても要件さえ満たされれば可能なのだということを、アマゾンは啓示している。

「ハイポニカ」すなわち「水気耕法」の「氣」は土に代わる大気であり、それはまた宇宙の無限のエネルギーを暗示するものであった。

土と訣別するのはなぜか。それは「母なる大地」には、実は植物の生育にとって阻害要因が多すぎるからだという。「植物の生育は土にこだわることをやめることで、指数関数的に伸びる」ことを「ハイポニカ」は実証してみせた。

IX. まとめ

自然の本質は「生成化育」であると中国の古典は教える。自然界では新生と枯死が絶えず繰り返されているが、その本質に潜んでいるのは「生成化育」の造化の力なのである。それは宇宙が「氣」に充ち満ちたエネルギーの大海であるからにはほかならない。

“氣に対する感受性の回復”――これは現代の我々に望まれる最も大切な課題の一つと言えよう。「氣」は確かに感じとれるものである。この「氣」から中小企業経営・成功への啓示を得られるべく、次なる解明へと進めてゆきたい。

参考文献

- 1) 燃えるだけ燃えて生きよ (成功への原動力) A. マクギニス
京セラ会長・稲盛和夫 監訳
(三笠書房 1992年)
- 2) 企業診断12月号 (経営診断の構図とその展開) P.73
合力 栄 著 (同友館 1992年)
- 3) 心理学への招待
北尾倫彦、小嶋秀夫 編
(有斐閣ブックス 1992年)
- 4) 個と集団の社会心理学
狩野素朗著 (ナカニシヤ出版 1989年)
- 5) 人間行動論入門
堀端孝治、高橋 超、磯崎三喜年 編
(北大路書房 1989年)
- 6) 企業行動の分析と課題
岡本康雄、小林孝雄 編
(日本経済新聞社 昭和60年)
- 7) 企業成長論
清水龍堯 著
(中央経済社 昭和63年)
- 8) 中堅・中小企業成長論
清水龍堯 著
(千倉書房 1986年)
- 9) 成功哲学
ナポレオン・ヒル 著
柳平 彬 監修、田中 忍 訳
(産業能率大学出版部 1977年)
- 10) 図説 東洋医学
山田光胤 著
(学研 1990年)
- 11) 気
——論語からニューサイエンスまで
丸山敏秋 著
(東京美術 1993年)
- 12) 気の世界
東京大学出版会
(東京大学公開講座 1993年)
- 13) 気不思議
——その源流をさかのぼる
池上正治 著
(講談社現代新書 1993年)

(平成6年12月15日受理)